

「栄光の架け橋」 校長 堀野智宏

新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、昨年開催される予定だった「東京 2020 オリンピック・パラリンピック」が、7月末より東京都をメイン会場にして開催されました。

ここ北海道においても、聖火リレーやサッカー、マラソンに競歩等と、様々な競技やセレモニーが行われ、アスリートや関係者等が大会の成功に向けて取り組みました。

オリンピック・パラリンピックの開催に際しては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が出される中、連日の感染者報告があり、その実施について疑問視する声もあった事は記憶に新しい事でしょう。

いざ始まってみると、相変わらず新型コロナウイルス感染者の報告は続き、選手や大会関係者にも感染者が見受けられながらも、世の風潮は一変してアスリートたちの活躍に声援を送り、史上最多のメダルラッシュに一喜一憂していました。特に、今回から正式種目となったスケートボードやスポーツクライミング等では、若手の活躍が際立っていました。

勝つ者がいれば負ける者がいます。自ら持つ力を思う存分発揮して、悔いのないプレーができた選手も、周囲の期待に応えようと無理をしてしまった選手もいたと思います。

タイトルの「栄光の架け橋」は、2004年に開催された「アテネオリンピック」報道番組の公式テーマソングとして作られた「ゆず」のシングル曲で、今大会中にもテレビやラジオで流れていました。

「誰にも見せない泪があった 人知れず流した泪があった」で始まる名曲で、ロズさんだ人も多いと思います。

曲中の人物は、厳しい道のりを一歩ずつ歩き続けてきました。何度も諦めようとして諦めきれず、かつての自分が思い描いた夢の中に居続け、それを叶えようと生きてきました。そして今、ようやくその夢を叶える瞬間を迎えたのです。

この歌は、決してオリンピック・パラリンピックで競技するアスリート達への応援歌だけではないと私は考えます。

人は、それぞれが思い描く夢を持っています。生きていく中（人生）で、その夢をかなえようと努力し続けます。その道のりは決して平坦ではなく、辛くて諦めかける時もあるでしょう。でも、夢を諦めずに努力を続けていけば、いつしか夢が叶う瞬間が訪れるはずです。

努力して流した泪の数だけ、叶った時の達成感は素晴らしいものになるはず。「泪の数だけ強くなれる」という歌もありましたね。

この歌では、「涙」ではなく「泪」という字を使っています。「涙」とは「抑えきれない感情が溢れ出すときに流れるもの」だそうです。それに対して「泪」は「ふとした瞬間に目から流れ出る水滴」を意味しています。歯を食いしばって努力を続け、その時こらえきれずに滲み出る泪。そこにはそれぞれの栄光があるはずです。

雨上がりに空にかかる「虹」のことを、北欧神話では「ビフロストの橋」と言います。人の住む地上（ミッドガルド）と、神々の住む天空（アスガルド）を繋ぐ橋の事です。

「栄光の架け橋」は、今の自分（地上）と夢（天空）を繋ぐ「ビフロストの橋」なのではないでしょうか。